木戸孝允日記に記載された教育博物館の建設

明治初期の博物館計画に関する研究

ABOUT THE EDUCATIONAL MUSEUM, WHICH IS DESCRIBED IN TAKAYOSHI KIDO DIARY

A study on about the museum plan in early stages of meiji

河 田 健*

Takeshi KAWATA

This paper verified the description of "Takayoshi KIDO diary" about the construction phase of the Educational Museum as early museum building in Japan.

It was confirmed that Takayoshi Kido was going 22 times to the construction site of the educational museum in August 1876 to January 1877, and he was deeply involved in the construction of the educational museum.

The support of the Ministry of Engineering by the connection between Takayoshi Kido and the former Choshu-han clan of Hiraoka Michiyoshi revealed the situation where a building with a new function called a museum was built.

Keywords : *Takayoshi KIDO diary, the Educational Museum, Fujimaro Tanaka, Ryuichi Kuki, Michiyoshi Hiraoka, the Ministry of Engineering*

木戸孝允日記, 教育博物館, 田中不二麿, 九鬼隆一, 平岡通義, 工部省,

1. はじめに

教育博物館（現国立科学博物館）は、日本に近代教育制度を導入する過程で設立され、明治 10 年に竣工したわが国初期の博物館建築である。明治 12 年には収蔵庫、倉庫を増築、明治 13 年に書庫、書籍閲覧室、明治 15 年に展示室、明治 18 年に展示室及び講義室を増築し、施設を充実させていく。¹⁾ その後明治 21 年には御茶ノ水の湯島聖堂に移転し、本館は東京美術学校の校舎となり、明治 44 年 1 月 25 日に焼失することになる。

教育博物館の建設については、現存しないこともあり近代建築史の分野では十分検証されて来なかった。堀越三郎によると教育博物館は、「本邦建築家設計の官庁建築」²⁾と整理されている程度である。「国立科学博物館百年史」の中では、「当時官庁の造営は工部省によって行われていたが、学校建築は例外であった。博物館の新築は学校に属するものとして、文部省の手で造営される事になり、6 月中旬に着工した。工事は両会計年度をまたがって継続され、敷地面積 55,368 m²(16,749 坪)に建坪 724 m²(219 坪)木造 2 階建ての新館が 12 月には一部を残してできあがった。」³⁾と記述がある。教育博物館は文部省が直営で工事を行ったようだが、当時文部省には技術者がいない中で具体的にどのように工事を進めていったか詳細は不明である。明治初期の博物館建築は、上野博物館の J.コンドルや遊就館のカペレッティのようにお雇い外国人が関わっているものも

あるが、教育博物館にはお雇い外国人が建設に関わった形跡はない。

教育博物館の建設当時に関する先行研究として博物館学の分野では、椎名仙卓⁴⁾、内川隆志⁵⁾、財部香枝⁶⁾等の論文があり研究が進んでいるが、いずれも博物館制度や運営上の立上げに関する部分であり、施設整備に関する内容については触れられていない。

教育博物館の建設は当時国家的プロジェクトであり、明治政府の上層部にいた木戸孝允が関わっていたことが知られている。拙稿「教育博物館の平面計画について」⁷⁾では、教育博物館の平面計画について考察する過程で木戸孝允が大きく関わっている事を明らかにした。木戸孝允は詳細な日記を残していることが知られており、この「木戸孝允日記」⁸⁾を通覧すると、教育博物館の建設の時期について頻繁に西洋建築の工事現場に足を運んでいることが確認できる。木戸孝允については、伝記をはじめ近代日本史の分野で多くの論考が出され、明治期においては版籍奉還・廃藩置県や岩倉使節団等の政治家としての彼の活動を論じる中で、この彼の日記が引用されているが、木戸孝允がこの時期に西洋建築の建設現場に通っていたことについて考察されたものはない。⁹⁾

本稿は、この「木戸孝允日記」の記載内容を検証し、我が国初期の博物館建築である教育博物館について、建設段階における木戸孝允の関わり及び施設整備の経緯を考察することを考えている。

* 佐藤総合計画 プロジェクトリーダー

Architect, Design Chief, AXS SATOW inc.

2. 教育博物館計画の経緯と木戸孝允

教育博物館の計画は、文部大輔田中不二麿、教育博物館館長畠山義成、文部学監ディビット・マレーを中心に進められていたことが知られている。田中不二麿は、尾張藩出身で、文部省設立時の明治4年より文部大丞となる人物で、同年11月に出発する岩倉使節団にも文部理事官という立場で加わっている。¹⁰⁾ 岩倉使節団の副使であった木戸孝允とはこの頃から信頼関係があったようである。洋行時の「木戸孝允日記」には、「此度同行中に田中不二麿あり、余の同志なり」¹¹⁾ と記されている。

木戸孝允は、岩倉使節団での洋行中に多くの博物館等を視察していたことが、岩本陽児「木戸孝允の欧米における博物館理解の形成」¹²⁾ の中で明らかにされている。この中で木戸孝允は、アメリカではスミソニアン、フィラデルフィア等8館、イギリスでは大英博物館等19館、フランスでは9館、その他オランダ・ドイツ・イタリア等20館を訪れている。これら多くの博物館等を視察した理由として、「19世紀後半の欧米で、首都に置かれた大型博物館は、一国の文化力を誇示し、国賓を接待する場でもあった」と受け入れ側の都合があったとされている。これら博物館の視察の経験は、木戸孝允に博物館設立の必要性を認識させたものと考えられる。

また木戸孝允は、岩倉使節団の洋行から帰国して以降、教育問題に強い関心を持っていたようである。松尾正人は「木戸孝允」のなかで、「教育については明治国家の将来を支える最大の課題と重視していた。」¹³⁾ と分析している。森川輝紀は「近代天皇制と教育」のなかで、「西欧の文化的伝統の厚みと教育的側面に着目し、日本の近代化の思想的基盤形成の方法に関心を深めていくことになる。」¹⁴⁾ と洋行後の木戸孝允の思考を分析している。おそらく木戸孝允は、教育博物館の整備事業に関して、近代教育を導入する上での重要な事業だという意識を持っていたものと考えられる。

教育博物館の前身となる文部省の博物館は、明治4年にわが国最初の博物館として設立されたが、明治6年3月ウィーン万国博覧会に参加するため太政官正院におかれた博覧会事務局に合併された。合併から2ヵ月後の明治6年5月8日、5月30日に田中不二麿は、博物館の設置目的の違いを主張し、文部省の博物館と太政官正院の博覧会事務局との分離の上申を正院に提出している。正院から回答が無いため、田中不二麿は7月15日に太政大臣三条実美に、11月10日には右大臣岩倉具視に、更に翌年明治7年1月13日再度三条実美に上申書を提出している。そして2月14日には文部卿就任早々の木戸孝允から三条実美に上申書を提出し、¹⁵⁾ 翌明治8年2月9日文部省の博物館の分離は、太政大臣三条実美より認められることになる。

文部卿を退いた後も、木戸孝允と文部官僚との交流は続き、特に教育博物館設立の中心人物であった田中不二麿との関係は継続していたようである。「木戸孝允日記」を確認すると、文部省の博物館分離が認められる明治8年2月からフィラデルフィアで開催される独立百年記念万国博覧会出席のため田中不二麿が渡米する明治9年4月までの間に、木戸孝允と田中不二麿は14回会っていることが確認できる。¹⁶⁾ 特に明治8年7月21日の日記には、「七字前より畠山義成の招に正二郎と同行す同客神田孝平榎村忠直大山覺之助田中不二麿モリー夫妻なり畠山はモリーと同居なり」と記されている。¹⁷⁾ 木戸孝允は、畠山義成の家を訪れ、田中不二麿、ディビット・マレー

と顔を合わせている。このタイミングは、ディビット・マレーが渡米する2ヶ月前である。ディビット・マレーの渡米については、教育博物館に展示する教育関連物件の収集購入が契約内容に含まれており¹⁸⁾、彼らは教育関係の話題を中心に教育博物館に関する情報交換を行ったものと考えられる。

田中不二麿、畠山義成等は、明治9年4月から12月まで独立百年記念万国博覧会出席のため渡米し不在となる。教育博物館の施設整備は、国内に残った文部大丞九鬼隆一が責任者となって進めたものと考えられる。工事期間は、先にも示した通り、明治9年6月中旬頃に始まり、12月には一部を残してできあがったとされている。

この時期の「木戸孝允日記」を通覧してみると、Table1のように明治9年8月から明治10年1月までの半年間に、木戸孝允は22回も西洋建築の建設現場に通っていることが確認できる。¹⁹⁾

当時木戸孝允は、3月に参議を辞任した後、内閣顧問となり、9月には宮内省に出仕するものの、この時期の「木戸孝允日記」を見て行く限り、内務省や文部省にも登庁しており、国内のさまざまな懸案事項に関係していたものと考えられる。

木戸孝允の建設現場へ足を運んだ回数は、月によってばらつきはあるものの、8月、11月は、6回、7回に及んでおり、現場の担当ではなく、政府の上層部にいた木戸孝允がこれだけの回数通っていることから、教育博物館の事業を重要視していたことがうかがえる。

Table1 Number of times T.Kido has passed to construction site

Month	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	Jan.	Total
Times	6	4	1	7	3	1	22

文部省は明治9年の段階で、東京開成学校、東京医学校、東京外国語学校、東京師範学校、東京女子師範学校、東京女学校の6校を東京で運営していた。²⁰⁾ この中で、東京開成学校は明治6年、東京医学校は明治9年に建設された西洋建築であった。東京師範学校、東京女子師範学校については、御茶ノ水の湯島聖堂の建物を利用して運営していた。東京外国語学校及び東京女学校の概要については明治9年に廃校となるため不明である。西洋建築として新築された東京開成学校及び東京医学校については、工部省によって建設されたことが明らかになっている。²¹⁾ 工部省は明治3年に設立され、官庁施設の整備を担当していたが、明治9年3月29日以降文部省の施設は工部省の整備の対象から外している。工部省沿革報告によると、「廿六日此ヨリ先三月廿九日文部省所管ノ諸学校等ハ其体裁構造ヲ各學科専修教師ノ意見ニ採ルヲ以テ其風趣大ニ諸官廳ト異ナリ且ツ寄付金ヲ該費ニ加フル等ノ事アルヲ以テ費金千圓以上ニ渉ルモノト雖該省自ラ之ヲ擔當經營センヲ太政官ニ稟申セルヲ以テ之ヲ本省ニ下問セラル此ニ於テ該建築特別ノ充可ハ本省敢テ異議ヲ容レサルヲ上答ス此日該省ノ申請ヲ許可セルノ令アリ」²²⁾ と記載されている。学校建築は、教師によって意見が異なり、且つ予算面でも官庁施設とは異なり寄付金を工事費にあてたりするため工部省では調整の難しい施設であったことが考えられる。教育博物館は、学校ではなく、建設段階で意見を言う学芸員もなく、予算に寄付金を当てる予定もなかったわけだが、学校と同様の扱いとなり、文部省から直営の形で工事発注されたようである。

なお、文部省の博物館分離が認められた明治 8 年 2 月から明治 10 年 1 月までの期間について、「木戸孝允日記」の中で教育博物館に関連すると考えられる記述を整理すると Table2 のようになる。

Table2 Description of Kido Takayoshi diary

Month	Day	Described contents
明治8年		
2	27	昨夜より大雪田中文字部大輔野村同大丞（中略）来訪
3	12	（前略）文部省に至り田中文字部大輔野村大督學九鬼四等出仕等と深川平清に至り時事を閑話し九字前歸寓（以下省略）
	15	（前略）今晚米國人モリー夫妻パーソン夫妻佐々木和二郎姪彦太郎余等夫妻と同食（以下省略）
	24	（前略）田中文字部大輔九鬼〃野村素介等来話共晩食（以下省略）
	25	（前略）田中不二鷹の約に趣く同客福澤諭吉西村茂樹加藤弘藏津田真一郎筑作麟祥小幡徳二郎其外数名なり（以下省略）
	31	（前略）田中を訪ふ不在山縣征介を訪ひ直に歸家田中〃来訪（以下省略）
4	23	晴田中〃井上馨来話（中略）今夕米人モルリー之案内にて六字過より彼高松彦太郎一同至るパーソン夫妻〃同席十字歸家（以下省略）
5	24	（前略）文部省に至る田中大輔九鬼〃野村素介と向島邊に遊歩し歸途八百善に至り酒飯を認む々閑時勢の利害を語り歸家（以下省略）
6	10	（前略）野村素介の約に至る伊藤博文田中不二鷹九鬼〃同席十一字過歸家留守へ來客
7	21	（前略）七字前より島山義成の招に正二郎と同行す同客神田孝平横村忠直大山党之助田中不二鷹モリー夫妻なり島山はモリーと同居なり十字辭去（以下省略）
8	31	晴米人モルリー来話（以下省略）
10	3	曇田中不二鷹來て近情を談す（以下省略）
	8	（前略）モルリー夫妻來る十一日より一應歸米せしに付暇乞に來る岡政一條公の命を帶
	9	（前略）モルリー杉浦〃河村海軍大輔等に面会七字前歸家（以下省略）
	23	晴田中不二鷹來話近情云々（以下省略）
11	5	（前略）田中不二鷹催にて府下學者連元聖堂に集會せり（以下省略）
	29	（前略）皇后御出被遊るに付田中文字部大輔より余等夫妻へも出席の案内ありしけれども余の不快且妹死去一條に付いづれも不能出席
明治 9 年		
3	1	晴田中不二鷹へ宅地の事に付一書を投せり（以下省略）
	3	（前略）田中不二鷹來話外客來二名來書二通（以下省略）
	6	（前略）平岡通義林〃石川〃を訪ひ來る宅地へ同行し地勢を檢查せり（以下省略）
	12	晴田中不二鷹米國博覽場一條に付來話（以下省略）
	23	晴山本清十田中不二鷹過日同人より教育一條に付米行の義相談し其事昨日沙汰なりし由（以下省略）
4	24	晴二字頃より田中不二鷹を訪ふ不在（以下省略）
	20	（前略）今日案内あり然るに田中不二鷹不日米行に付今日同氏別杯の約束あり歸途杉孫七郎を訪ひ六字前より松と田中不二鷹の宅に至る同客六人食後談話數字十字歸家（以下省略）
	23	雨田中不二鷹不日米國へ出発に付告別の爲來訪文部省中の事件教育事務等の事を談せり（以下省略）
	24	晴田中不二鷹を訪ふ十一時歸家（以下省略）
	26	曇又雨平岡通義來話共に新求地所に至る（以下省略）
5	8	（前略）平岡より家の園面を送りし三字より杉〃孝敏を訪ふ平岡通義亦來話九字歸家（以下省略）
	4	（前略）九鬼隆一文部省中云々（以下省略）
	18	晴平岡通義〃を同伴して來り新築の縄張りを到せり（以下省略）
	23	晴朝新築土地に至り無間歸家當今の形成に付意見の草拔を認む（以下省略）
	26	（前略）新築地に至る（以下省略）
6	1	（前略）文部省に至り九鬼隆一に面會せり十二字歸家（以下省略）
7	4	（前略）米國田中不二鷹九鬼隆一大山巖等の書狀到來（以下省略）
	5	（前略）九鬼隆一藤井政太郎横村正直の書狀を認む（以下省略）
8	2	晴九鬼隆一來話朝倉新建築の事を依頼せり（以下省略）
	5	（前略）太政大臣伊藤博文山縣有朋外北海道其外羽州へ發途に付太政大臣へ告別其より野村素介の招き至る九鬼隆一服部一三など同席せり十字時歸家（以下省略）
	6	晴新築場に至り（以下省略）
	8	（前略）新築場に至る余の約せしものと築造違なるものあり十三字歸家（以下省略）
	10	（前略）田中不二鷹島山成山尾常二郎へ書狀を出せり
	11	（前略）杉孫七郎と新築場に至る（以下省略）
	13	（前略）新築場に至り歸家（以下省略）
	14	（前略）新築場に至り歸家（以下省略）
	17	晴朝倉來て普請一條の事を相談せり西洋館も同人へ託し置けり今朝平岡通義横浜歸着電信を送り余今朝より箱根木賀温泉へ出立の用意をなせしと雖新築を平岡へ依頼せし事ありしに付一日延引いたし四字より平岡を訪ひ種々談し置けり（以下省略）
	18	晴山尾康藏平岡通義（中略）來る（以下省略）
9	19	（前略）平岡通義（中略）へ書狀を出せり（以下省略）
	25	（前略）平岡通義（中略）へ書狀を出せり（以下省略）
	26	（前略）平岡通義（中略）書狀到來（以下省略）
	29	（前略）平岡通義（中略）へ書狀を出せり（以下省略）
	30	曇又雨平岡より來書直に返答を出せり新築の差圖屢館歸せしには甚失望なり（以下省略）
	14	曇時々小雨六字平岡通義を訪西洋建築の事を相談せり其より新築場に至り（中略）其より建築場に至り平岡通義（以下十二行欠）と窓床等の事を相談せり六字歸家（中略）平岡通義來話（以下省略）
	16	（前略）杉と新築場に至り（以下省略）
	17	（前略）平岡通義來訪明日より木曾へ出立せり
	18	（前略）建築場に至り（以下省略）
	20	（前略）今日西洋流建築棟梁と新築場に至る（以下省略）
10	5	曇九鬼隆一文部省中の事（中略）來話（以下省略）
	27	（前略）新築所に至り（以下省略）
	12	晴穴戸磯高須健介と新築場に至り（以下省略）
	15	（前略）小介奥十三と新築場に至る余は直に宮内へ參仕（以下省略）
	18	（前略）十字より新築場に至る（以下省略）
11	21	（前略）新築場に至り直ちに岩倉邸の招に至る（以下省略）

Month	Day	Described contents
11	22	（前略）新築場へ北茂と同行し直に宮内へ參仕せり（以下省略）
	24	（前略）平岡通義を訪ひ五字歸家（以下省略）
	25	（前略）新築地に至り（以下省略）
	28	（前略）十字過新築場に至り高力に中庭の樹木栽様等の事を託し置けり（中略）平岡通義を訪ひ（以下省略）
12	1	（前略）鈴木孫八を誘ひ新築の場所に至り樹石等の位置を託して置けり（以下省略）
	9	（前略）四字より新築場に至り（以下省略）
	14	（前略）平岡通義來話（以下省略）
	29	（前略）九鬼隆一長三州を訪ひ五字歸家（以下省略）
	31	（前略）二字より新築場に至り島尾小彌太と相會す（以下省略）
明治10年		
1	3	晴八字過九鬼隆一の宅に至り（中略）平岡通義杉山孝敏を訪ふ（以下省略）
	4	（前略）平岡通義來話一字頃より新築場に至る（以下省略）
	7	（前略）新築場へ散歩し（以下省略）
	8	（前略）平岡通義を尋ね（以下省略）
	11	（前略）田中不二鷹を訪ひ談論數時不二鷹は四五日前米國より歸朝せり（以下省略）

3. 木戸孝允の通っていた新築場が教育博物館であることの検証

木戸孝允の通っていた西洋建築の工事現場について、「木戸孝允日記」の中では、これが教育博物館であったことは明確に記述されていない。日記の中では、「新築場」という書き方が一番多く、その他「新建築」「西洋館」「新築」「西洋建築」「新築所」といった記述で記されている。木戸孝允が通っていた「新築場」の工事現場が、教育博物館であったと考える根拠は以下の通りである。

1.教育博物館の施工期間と木戸孝允日記の記載の時期が一致する。

「国立科学博物館百年史」によると、教育博物館の建設は、6 月中旬に着工し、12 月には一部を残してできあがったとされている。²³⁾

「木戸孝允日記」によると、木戸孝允は、明治 9 年 3 月に一度敷地を確認した後²⁴⁾ 4 月下旬に新敷地を確認している。²⁵⁾ そして 5 月 9 日教育博物館は上野博物館との土地交換に応じ、²⁶⁾ 6 月に工事着工することになる。

8 月 2 日木戸孝允は、九鬼隆一から工事の依頼を受け、8 日にはすでに木戸孝允は建設内容に不満を述べている²⁷⁾ ことから着工後 1 ヶ月半経ったこの時点で、ある程度工事が進んでいたものと考えられる。

更に 11 月 28 日には外構について記載²⁸⁾ があり、12 月 1 日には鈴木孫八に植栽計画を依頼²⁹⁾ していることを考えると、本体工事は 12 月にはほぼ出来上がっていたと考えられる。

2.当時文部省が直営で発注している工事は教育博物館のみである。

「木戸孝允日記」によると明治 9 年 8 月 2 日に、「新築の事」は、文部大丞九鬼隆一が木戸孝允を訪れ、木戸孝允を通じて朝倉清一に依頼している。

当時の文部省の営繕事業の状況について文部省年報を確認すると、各学校に対して補助は出しているものの、文部省で直接この時期に教育博物館以外の建設事業が動いていた記録はない。文部省年報より明治 9 年 7 月から明治 10 年 6 月までの「處務概旨」³⁰⁾ によると、「東京醫學校解剖所」「東京師範學校教場」「大坂英語學校教場」「東京大學醫學部土藏」に対してそれぞれ築造のための予算をつけているが、各学校に対して補助金という形で出資しており、文部省が直営で発注しているまとまった工事は教育博物館のみである。

3.教育博物館の増築工事は工部省が担当している。

教育博物館は、13 年に書庫、書籍閲覧室を増築しており、これに関して「国立科学博物館百年史」では工部省に委託したことが記載されている。³¹⁾ この書庫の増築に関しては、工部省の林忠恕が

設計したことが明らかになっている。³²⁾ 当時文部省が学校等の営繕事業に対して基本的に直営で工事発注をしている時代に、書庫、書籍閲覧室の増築を工部省に依頼していることを考えると、教育博物館の本体工事についても工部省が関わっていたものと考えられる。

4. 木戸孝允日記から読み取れる教育博物館建設の経緯

「木戸孝允日記」を見ていくと、木戸孝允は明治9年3月から4月にかけて頻繁に渡米前の田中不二麿と交流していることが確認できる。3月1日「田中不二麿へ宅地の事に付一書を投せり」³³⁾と記載されている。この宅地とは、上野の寛永寺跡地の教育博物館計画地であると考えられる。3月3日「田中不二麿來話」³⁴⁾と記載されており、この計画地の件について打ち合わせをしているものと考えられる。3月6日平岡通義林^{マヽ}石川^{マヽ}を誘ひ来る宅地へ地勢を検査せり」³⁵⁾と記載しており、計画地を実際に確認している。この時同行している平岡通義とは、当時工部省営繕寮頭であった人物である。平岡通義は長州藩出身であり、木戸孝允と平岡通義は頻繁に交流している間柄である。木戸孝允としては建築の専門的な視点から相談しやすい人物であったと考えられる³⁶⁾。林、石川は林忠恕、石川正員で共に工部省の技術官僚である。そして3月22日田中不二麿は、太政大臣三条実美に上野に博物館を建設する上申を提出した。「上野山内當省用地ニ於テ先以學術博物場ノ一部ヲ構造致度将来逐次増築逐ニ該館ノ完全ニ至ルヲ要ス尤該費用ハ金壹万五千圓以内ノ見込ニテ當會計年度當省額外常費營繕費ノ範圍ニ在テ可相辦候條速ニ裁裁相成候様致度此旨相伺候也」。³⁷⁾ 上申後まもなく教育博物館は、3月29日事務局を湯島から上野山内の東四軒寺町跡（現在の国立科学博物館あたり）の東京医学校教師館の第一舎に仮移転している。

これに前後して3月12日「田中不二麿米國博覽場一條に付來話」、³⁸⁾ 23日「田中不二麿過日同人より教育一條に付米行の義相談し其事昨日沙汰なりし由」、³⁹⁾ 4月23日「田中不二麿不日米國へ出発に付告別の爲來訪文部省中の事件教育事務等の事を談せり」⁴⁰⁾ など記載があり、木戸孝允は、フィラデルフィア万国博覧会参加における米国での情報収集と田中不二麿渡米期間中の教育行政について気にかけていたことがうかがえる。

この頃、教育博物館は上野博物館と計画地問題を抱えており、前年から両館の懸案事項として田中不二麿と町田久成との間で継続協議されていた。⁴¹⁾ 「木戸孝允日記」によると、4月26日木戸孝允は、平岡通義と新しい敷地を確認し、⁴²⁾ 4月28日には平岡通義より図面が送られてきている。⁴³⁾ 教育博物館の図面は、工部省が用意したものと考えられる。

田中不二麿、畠山義成が渡米すると不在時に国内で留守をあずかるのは文部大丞九鬼隆一である。九鬼隆一とは、摂津の国三田藩の出身で、慶応義塾で福澤諭吉のもとで学んだ後に文部省に出仕、後に帝国博物館（現東京国立博物館）総長となる人物である。⁴⁴⁾ 「木戸孝允日記」によると、5月4日「九鬼隆一文部省中云々」⁴⁵⁾と記載しており、木戸孝允は九鬼隆一を訪れたようである。国立科学博物館百年史によると、5月9日九鬼隆一は、田中不二麿の代理として、大久保利通の要求による教育博物館と上野博物館の計画地の交換手続きに応じている。⁴⁶⁾ 「木戸孝允日記」では、5月18日「新築の縄張りを致せり」⁴⁷⁾と記載があり、建物位置を確認している。そ

の後木戸孝允は、5月23日、26日にも計画地を訪れている。6月1日にも「文部省に至り九鬼隆一面會せり十二時歸家」⁴⁸⁾と記載されており、木戸孝允は文部省に登庁し九鬼隆一と打合せをしている。そしてこの頃教育博物館は工事に着手したものと考えられる。工事着工については「木戸孝允日記」には記載がない。木戸孝允は6月2日から7月20日まで明治天皇の奥羽巡行に同行していたため、起工の式典等に関わらなかったものと思われる。⁴⁹⁾ 7月4日には岩手県の前沢滞在中に「米国田中不二麿九鬼隆一（中略）の書状到來」⁵⁰⁾と記載されており、渡米中の田中不二麿、九鬼隆一と引き続き連絡を取っていることが確認できる。そして九鬼隆一からは翌日にも書状を受け取っている。

8月2日「晴九鬼隆一來話朝倉^{マヽ}新築の事を依頼せり」⁵¹⁾という記載がある。九鬼隆一が木戸孝允を通じて朝倉という人物に教育博物館の工事対応を依頼している。先に述べたように明治9年3月29日以降、文部省の学校等の整備事業は工部省の事業対象から外されていたため文部省直営で発注されたが、当時の文部省には、営繕組織がなく建築技術者もいなかった。そのため九鬼隆一は教育博物館の建設を進めるにあたり、西洋建築の知識のある人物が必要になり木戸孝允に技術的サポートができる人物を依頼していたことが考えられる。朝倉という工事監理のサポートを依頼された人物については、当時工部省に在籍していた朝倉清一と考えられる。朝倉清一は幕府の棟梁だった人物で横須賀製鉄所の工事監督等の経験があり⁵²⁾、西洋建築の建設を進めるにあたり経験を有していた。

8月5日木戸孝允は、太政大臣三条実美等が北海道および東北地方へ出発する前の式典に招かれ、この時九鬼隆一同席している。翌6日の「木戸孝允日記」には、「晴新築場に至り」⁵³⁾と記載され、現場を訪れたことが記されている。そして8日には「新築場に至る余の約せしものと築造違なるものあり十二時歸家」⁵⁴⁾と記載されている。なにか木戸孝允の指示と現場の相違があったものと思われる。10日木戸孝允は渡米中の田中不二麿と畠山義成に書状を送付している。その後、11日、13日、14日と木戸孝允は続けて現場に通っている。

8月17日の「木戸孝允日記」には、「朝朝倉^{マヽ}來て普請一條の事を相談せり西洋館も同人へ託し置けり今朝平岡通義横浜歸着電信を送れり余今朝より箱根木賀温泉へ出立の用意をなせしと雖新築を平岡へ依頼せし事ありしに付一日延引いたし四字より平岡訪ひ縷々談し置けり」⁵⁵⁾と記している。午前中に朝倉清一を呼んで相談したのちに、横浜にいた平岡通義に電信を送り、予定していた箱根行きを一日ずらして夕方4時に平岡通義を訪れて打ち合わせをしている。朝倉清一に現場を依頼していながら、営繕寮頭であった平岡通義まで引っ張り出していることを考えると、現場が木戸孝允のイメージしていた通り進んでいない状況をなんとかしようとしていた様子が見えてくる。その後も木戸孝允と平岡通義とのやりとりは続いている。翌18日朝に平岡通義は木戸孝允宅を訪れており打ち合わせをして、その後木戸孝允は箱根に出発することになる。木戸孝允は箱根滞在中の19日、25日、26日、29日と平岡通義との書状のやりとりをしている。残念ながらこの時の内容は残されておらず確認できない。そして30日の「木戸孝允日記」には、「曇又雨平岡より來書直に返答を出せり新築の左圖屢齟齬せしには甚失望なり」⁵⁶⁾と記載されており、木戸孝允の指示内容と現場の状況が大きく異なっ

いたことを嘆いている。9月13日箱根から東京に戻り、翌日14日の日記には木戸の不満と感じている部分について記載がある。「平岡通義を訪西洋建築の事を相談せり其より新築場に至り（中略）其より建築場に至り平岡通義（以下十二行欠）と窓床等の事を相談せり六字歸家（中略）平岡通義來話」⁵⁷⁾と記述されている。木戸が気になった「窓」「床」について、構造的なことまで木戸が理解していたとは考えにくいと、ここでは意匠面について平岡通義と相談したものと考えられる。

Photo1 Facade of the Educational Museum

教育博物館の外観意匠 Photo1 について、屋根は日本瓦で葺き、外壁は漆喰を施し壁の出隅部分は石張りとしていた。中央エントランス部分には半円形の破風がデザインされており、これは教育博物館の大きな特徴となっている。また両翼端部にも半円形の破風が取り付けられている。

Photo2 Window shape of the Educational Museum

Photo3 Window shape of the Shinbashi Station

教育博物館の「窓」の意匠について、実現したものは縦長長方形のシンプルな形状で、ガラスの上げ下げ窓に外部にはガラリ扉がついている。1階はヴォールト型、2階には三角形のペディメントが付いている。Photo2 平岡通義の調整前にもどのは形状だったか不明だが、実現したものは異なっていたものと思われる。後年伊東忠太は、「木造漆喰塗りの極めて簡素なる伊太利ルネサンス型で遙かに新橋停車場の型に據る所がある。」⁵⁸⁾と記載している。「窓」の意匠が明治5年に竣工した新橋停車場と同じ形状 Photo3 になってい

るため、近い印象になったものと考えられる。なお新橋停車場は、お雇い外国人ブリジェンスの設計によるもので、工部省が工事を担当している。

木戸孝允は、16日には現場を訪れ、17日には平岡通義が来訪し、18日には再び現場を訪れている。そして20日の日記には「今日西洋流建築棟梁と新築場に至る」⁵⁹⁾と記載している。ここで記載されている西洋流棟梁とは朝倉清一であると考えられる。10月の日記では木戸孝允は一度しか建設現場を訪れていないが11月に入ると6回も建設現場に通っていた。

11月28日「十字過新築場に至り高力に中庭の樹木栽様等の事を託し置けり（中略）平岡通義を訪ひ」⁶⁰⁾と記載されている。この頃になると本体工事の懸案事項が外構に移ってきたものと考えられる。高力という人物について、木戸孝允日記に高力正廣という人物が数回確認できるが詳細は不明である。そして12月1日「鈴木孫八を誘ひ新築の場所に至り樹石等の位置を託し置けり」⁶¹⁾と記されている。ここに記載されている鈴木孫八⁶²⁾とは、明治初期に活躍した盆栽家である。教育博物館は西洋建築でありながら松が植えられ植栽計画においては和風の印象が感じられる。Photo4

Photo4 External planning of Japanese style

12月は3回建設現場を訪れているほか、九鬼隆一や平岡通義とも情報交換をしている。翌明治10年1月4日「平岡通義來話一字頃より新築場に至る」。7日には「新築場へ散歩し」、8日には「平岡通義を尋ね」、9日には「四字より新築場に至り」と記載されており、新年早々教育博物館の建設を気にしているようである。⁶³⁾そして11日「田中不二麿を訪ひ談論數時不二麿は四五日前米國より歸朝せり」⁶⁴⁾と記載されている。この後、木戸孝允が建設現場に行った記載は見当たらない。田中不二麿が帰国したことで、教育博物館の建設を引き継いだのであろう。そして木戸孝允は24日京都に向けて出発し、5月26日没することになる。

5. まとめ

本稿は、明治初期を代表する政治家の一人である木戸孝允の残した日記「木戸孝允日記」の記載をもとに教育博物館の建設段階の状況について考察を行った。今回明らかになった点は以下のとおりである。

1. 教育博物館は、建設直前に上野博物館と土地交換を行ったことが知られている。この土地交換に先立って木戸孝允が計画地を確認

し、図面を確認していた。

2. 木戸孝允日記を通覧すると明治9年8月から翌10年1月までの間に木戸孝允が教育博物館の建築現場に22回も足を運んでいることが確認できた。文部官僚だけでなく、当時日本を主導する立場にあった木戸孝允が、教育博物館の建設に深くかかわっていたことが明らかとなった。
3. 文部大丞九鬼隆一は、木戸孝允を通して工部省に工事について依頼し、平岡通義、朝倉清一といった工部省の技術官僚がサポートする形で工事は進めていた。
4. 教育博物館の工事内容について、木戸孝允が不満に感じていた記載が確認できた。木戸孝允が建築の構造的なことまで理解できていたとは考えにくく、彼が不満に感じたのは意匠に関する部分だと考えられる。これは教育博物館が西洋建築の知識をもった人物が不在の状態で進められてきたこと、そして木戸孝允が岩倉市使節団を通して欧米の博物館建築をよく知っていたことが理由にあげられる。尚、窓廻りは調整後、新橋停車場と同様の形状になった。
5. 外構計画について、木戸孝允は盆栽家の鈴木孫八に対応を依頼した。このため、西洋建築でありながら、外構は和風の植栽計画となった。

明治初期の文部省の営繕事業は、当時まだ組織的に未熟な部分がありながらも、木戸孝允の存在及び木戸孝允と平岡通義という旧長州藩の繋がりによる工部省のサポートにより、博物館という新しい機能を持った建築の建設の状況が明らかになった。

注

- 1) 国立科学博物館百年史 国立科学博物館編 1977.10 pp.82-83
- 2) 堀越三郎 明治初期の洋風建築 丸善 1929.12 p.157
- 3) 国立科学博物館百年史 国立科学博物館編 1977.10 p.44
- 4) 椎名仙卓 「教育博物館の成立」 博物館学雑誌 全日本博物館学会 1977.3.30 pp.43-51 の他、日本博物館発達史 1988 pp.41-48、明治博物館事始め 思文閣出版 1989 pp.154-160、図説博物館史 雄山閣出版 1993 pp.70-77、などの著書がある。
- 5) 内川隆志 「明治初期における教育制度と博物館」 国学院大学博物館学紀要 第28号 2004 pp.3-28
- 6) 財部香枝 「デヴィット・マレーとスミソニアン・インスティテューションとの交流—明治初年の博物館創設過程」 博物館学雑誌 全日本博物館学会 2005.1.31 pp.21-40
- 7) 拙稿「教育博物館の平面計画について」日本建築学会計画系論文集 第648号 2010.2 pp.447-452
- 8) 木戸孝允日記 三 日本史跡協会編 1985.9.5 木戸孝允の日記には、その日に行った場所、会った人物、書簡のやり取りについて記載されている。
- 9) 木戸孝允に関する著書としては、大江志乃夫 木戸孝允 中央公論社 1969、村松剛 醒めた炎：木戸孝允 1987、松尾正人 木戸孝允 吉川弘文館 2007、などがある。
- 10) 海を越えた日本人名事典 日外アソシエーツ 1985.12 p.375
- 11) 木戸孝允日記 二 日本史跡協会編 1985.9.5 p.127
- 12) 岩本陽児 「木戸孝允の欧米における博物館理解の形成」 博物館学雑誌 全日本博物館学会 2000.12 pp.23-36
- 13) 前掲 松尾正人 木戸孝允 吉川弘文館 p.170
- 14) 森川輝紀 近代天皇制と教育 梓出版社 1987.4 p.95
- 15) 前掲 国立科学博物館百年史 pp.23-25
- 16) 前掲 木戸孝允日記 三 pp.147-310
- 17) 前掲 木戸孝允日記 三 pp.212-213
- 18) 吉家定夫 日本国学監ディビット・マレー 玉川大学出版部 1998.1 pp.159-163

- 19) 前掲 木戸孝允日記 三 pp.389-482 が教育博物館の建設時期と重なる範囲である。
- 20) 文部省第四年報明治九年度 文部省 1877 p.3-4 「明治九年七月至明治十年六月處務概旨」の中に、会計年度内の文部省人事や文部省が行った主な事業が記載されている。
- 21) 越野武 「開花のかたち」 日本の建築「明治大正昭和」第1巻 三省堂 1979.4 p.123
- 22) 工部省沿革報告 大蔵省編 1889.4 pp.759-760
- 23) 注 3) に同じ
- 24) 前掲 木戸孝允日記 三 p.296
- 25) 前掲 木戸孝允日記 三 p.323
- 26) 前掲 国立科学博物館百年史 p.40
- 27) 前掲 木戸孝允日記 三 p.396
- 28) 前掲 木戸孝允日記 三 p.454
- 29) 前掲 木戸孝允日記 三 p.455
- 30) 前掲 文部省第四年報明治九年度 p.8
- 31) 前掲 国立科学博物館百年史 p.65
- 32) 前掲 国立科学博物館百年史 pp.82-83
- 33) 注 24) に同じ
- 34) 前掲 木戸孝允日記 三 p.298
- 35) 前掲 木戸孝允日記 三 p.300
- 36) 平岡通義については以下に詳しい。建築雑誌 第277号 1910.1.25 pp.53-57、建築雑誌 第286号 1910.10.25 pp.44-47、建築雑誌 第287号 1910.11.25 pp.30-31、
- 37) 前掲 国立科学博物館百年史 p.41
- 38) 前掲 木戸孝允日記 三 p.302
- 39) 前掲 木戸孝允日記 三 p.306
- 40) 前掲 木戸孝允日記 三 p.322
- 41) 前掲 国立科学博物館百年史 p.40 このほか教育博物館と上野博物館との問題については、前掲 椎名仙卓 明治博物館事始 pp.103-109、関秀夫 博物館の誕生 岩波新書 2005.6 pp.116-119
- 42) 注 24) に同じ
- 43) 前掲 木戸孝允日記 三 p.326
- 44) 高橋眞司 九鬼隆一の研究 未来社 2008.8、北康利 九鬼と天心 PHP 研究所 1008.10、山本哲也 「九鬼隆一」 博物館学人物史上 雄山閣 2010.7 pp.89-98
- 45) 前掲 木戸孝允日記 三 p.329
- 46) 注 44) に同じ
- 47) 前掲 木戸孝允日記 三 p.334
- 48) 前掲 木戸孝允日記 三 p.340
- 49) 奥羽巡行の期間は、前掲 木戸孝允日記 三 pp.340-383
- 50) 前掲 木戸孝允日記 三 p.369
- 51) 前掲 木戸孝允日記 三 p.389
- 52) 村松貞二郎 日本建築技術史 地人書館 1959.11 p.15
- 53) 前掲 木戸孝允日記 三 p.394
- 54) 前掲 木戸孝允日記 三 p.396
- 55) 前掲 木戸孝允日記 三 p.401
- 56) 前掲 木戸孝允日記 三 p.406
- 57) 前掲 木戸孝允日記 三 pp.413-414
- 58) 写真で見た国立科学博物館 120年の歩み 国立科学博物館編 1998.3 p.15
- 59) 前掲 木戸孝允日記 三 p.417
- 60) 前掲 木戸孝允日記 三 p.454
- 61) 前掲 木戸孝允日記 三 p.455
- 62) 岩佐亮二 盆栽文化史 八坂書房 1976.5 p.110
- 63) 前掲 木戸孝允日記 三 pp.475-479
- 64) 前掲 木戸孝允日記 三 p.482

図版

Fig.1 明治東京全図 国立公文書館蔵 1876 部分拡大

Photo1 前掲 写真で見た国立科学博物館 120年の歩み 1998.3 表紙

Photo2 東京芸術大学百年史 東京美術学校編 第1巻 東京芸術大学百年史刊行委員会 1987.10 口絵 部分拡大

Photo3 石黒敬章 明治の東京写真 角川学芸出版 2011.3 p.10

Photo4 前掲 写真で見た国立科学博物館 p.19

ABOUT THE EDUCATIONAL MUSEUM, WHICH IS DESCRIBED IN TAKAYOSHI KIDO DIARY

A study on about the museum plan in early stages of meiji

Takeshi KAWATA *

* Architect, Design Chief, AXS SATOW inc.

This paper verified the description of "Takayoshi KIDO diary" about the construction phase of the Educational Museum is as early museum building in Japan. And it revealed the relationship with Takayoshi Kido, verified for impact on construction due to the fact that he was involved. The point that became evident this is shown below.

- 1.It is known that the Educational museum exchanged the site with the Ueno museum just before construction. According to the Takayoshi Kido diary, prior to the exchange of this site Takayoshi Kido had confirmed the planning site and drawings.
- 2.According to the Takayoshi Kido diary it was confirmed that he was going 22 times to the construction site of the educational museum in August 1876 to January 1877. Not only Takayoshi Kido was in a position to lead the Japan at that time, it became clear that was deeply involved in the construction of the educational museum.
- 3.Key persons that has been promoting the business of the educational museum, Education Vice Minister Tanaka Fujimaro, the educational museum curator Hatakeyama Yoshinari, Ministry of Education audit Debit Murray, were not in Japan during construction of the educational museum, because of they traveled to the US for the Philadelphia Expo. While responsible persons were absent, Ryuichi Kuki responded during construction. At the time Public buildings were in charge Ministry of Engineering, but after March 1876 buildings such as school had excepted from the project of them. Construction of the educational museum was ordered directly from the Ministry of Education like school. However the Ministry of Education at the time it was in a situation where there was no architectural engineers. Ryuichi Kuki asked Takayoshi Kido about the construction work. Actually Ministry of Engineering of technology bureaucracy Michiyoshi Hiraoka and Seiichi Asakura supported construction work underway.
- 4.For construction contents of the Educational Museum, It turned out that there was a point where Kido Takayoshi felt dissatisfied. It seems that he was dissatisfied with the design, because he seems to be unable to understand the structural one of architecture. This is because the educational museum was constructed without technicians with knowledge of Western architecture, and that Kido Takayoshi knew the European and American museum architecture through the Iwakura mission group.
- 5.According to the Kido Takayoshi diary design of a "window" and "floor" design was adjusted with Michiyoshi Hiraoka. resulting that window was become the similar shape as the Shinbashi station.
- 6.Regarding the external plan, Takayoshi Kido asked Magohachi Suzuki to design. Therefore, even though it is a Western building, outside design became a planting plan of Japanese style.

For the early Meiji era of the Ministry of Education Buildings Department business was at that time still organizationally immature. The presence of Takayoshi Kido, and the support of the Ministry of Engineering by the connection between Takayoshi Kido and the former Choshu-han clan of Hiraoka Michiyoshi revealed the situation where a building with a new function called a museum was built.

(2017年1月14日原稿受理, 2017年5月23日採用決定)